

幼女の日常

雨英

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ガブリエラ・ドールレス・ハイゼ。

彼女は転生者である。

彼女は魔導師である。

彼女は生存者である。

あと一つ。

付け加えるのであれば。

彼女は只人であった。

旧題「ペドフィリアが少女を求めるのは間違っているだろうか」

目次

愛しき束の間の鼾声

それは性的嗜好ではなく宗教	1
それは神ではなく存在 x	10
それは愛情表現ではなく愛情確認	23
それは刎頸之交ではなく管鮑之交	37

愛しき束の間の鼾声

それは性的嗜好ではなく宗教

人は弱い。脆い。

情けないところのある生き物だ。

強固な意志を持つ者は稀で、多くはいとも容易く流される。

今の私のように。

それは、簡単に認められるものではない。

だから宗教に縋るのだろう。

寛容で、偉大な自己肯定の為の道具に。

19日目の精進潔斎に私は勤しんでいた。

辛かった。

苦しかった。

それ以外の言葉は無用の装飾だ。

語るほど陳腐になる。

ガリガリと削られた私の精神は、ただひたすらに我が神を乞い、依存し、それだけによって折れずにいた。

だがまだ残り1日。

しかし、あと残り1日の、修行。

全てが水に攫われた。

痛いほどの冷たさ。

朧になる感覚。

遠退く水面。

雨の中でも、無理をしたのが祟ったのか。

3日前には止んでいたが、体力は酷く消耗していた。だから。

荒れ狂う流れから逃れることが叶わない。

困った。どうにか、したい。
どうしようもないわけだが。
何か、そう、何かが欲しい。
死を受け入れられる理由が。
死を受け止める余裕が。
救いが欲しい。

回らぬ思考。それでも、求める。

ああ、幼女、幼女、幼女よ。

願わくば死告天使よ、幼女であれ。

願わくば閻魔よ、幼女であれ。

願わくば獄吏よ、幼女であれ。

素面では日に一度しか思わないようなことを、死に際だからか、本気で、ただ一心に祈った。

そういえば、確か河とは龍神ではなかったか。

幼女に擬人化とかしてはくれないだろうか。

我が身を攫う龍神が、ロリだったなら。

溺死は最も苦しい死に方だと聞くが。

幼女のしたことだから仕方がない。

そう、諦めることができる。

大人しく、飲み込まれよう。

畝る激流は蠕動のようで。

暗い深みへと私を取り込む。

とても、艶めかしかった。

これが幼女の……体内、か。

体温を奪われ過ぎたのか、温かく感じる。

ゴオと鼓膜を揺らす音は、血流を思わせる。
どこかで聞いた事がある気がする。
あれは、どこだったろうか。

とても、穏やかな気分だ。

最後に、頭がギリギリと痛んで。

その先で、光を見た。

「その原因は、貴様の場合は、科学の世界で、男で、戦争を知らず、追い詰められていないからだな？」

声が聞こえた。

何故だか知らないが苛立っているようだ。

頻りに豊かな顎髭を手で梳いていた。

「ならば、その状況にぶち込めば、貴様でも、信仰心に目覚めるのだな？」

貞子よりも豊かな毛量だ。

あれではとても重いのではないだろうか。

見てくれは仙人のような老翁だ。

「今さら、媚びても遅いわ！」

それ程大きい声を出して大丈夫なのか。

何かの拍子に顎が外れても不思議ではない。

しかし、先程から誰と話しているのだろう。
と、思ったが。

もしかしなくても、耄碌しているんだろう。施設から抜け出したのだろうか。

「もう、良い。分かった、ともかく、試してやる」
介護されている方も、大変だなあ。

この様子だと、普段から職員さんに怒鳴っつていそうである。なんとも横柄な人だ。

とりあえず、警察に連絡して保護してもらおう。

「貴様で試してやろうというのだ!!!」

うん？

スマホはどこだ。

パンツのポケットにある筈………んん？

何故か、手の感覚が無いんだが。

どうということだ？

……ああ、そうだ。

今さら、気づいたのだが。

私は死んだはずでは？

「ンガツ、アガツ、ハーツ、ハーツ、アヴツ」

奇声をした方を見ると耳の前辺りを摩っていた。

顎を嵌め直したんだろう。

言わんこつちやない。

その髭、半分くらい、いやいつその事全部剃り落としたらどうだろう。

「……お前も、大概だな」

ふむ？

目線があった。

なんとというか、とても淀んだ目をしている。

「どうして解脱しようとしなのだ」

目を擦っているが可愛くない。有罪。

まさか、此方を認識できているのか？

解脱、というと確か仏教のだよな。

前世の記憶も無くして、輪廻から抜け出したいだなんて思うはずがないだろう。

「どうして信仰心を抱かないのだ」

む、もしや先達の方でございましたか。

これは、失礼いたしました。

ですが、どうかお待ちください。

オニヤンコポンは、篤く敬つていますよ？

それはもう、日頃から片時も忘れずに。

ですが、延喜式巻10に記されている礼拝の仕方は少々、誠に遺憾ながらも、凡人たる私には荷が勝ちすぎたようなのです。

あるいは、巡り合わせが悪かったかと。

いや、分かっていきます！

私は確かに怠りました。

そこに救いを見出して、苦境に抗うこともなく。

漫然と龍神ロリの体内を流されました。

「何故だ、欠片も信仰心を感じられない」

そ、そんな!?

おお、神よ、お慈悲を、どうかお慈悲を!!

この不心得者の祈りも、お受け取りください。

「というか。龍神ロリだとか、オニヤンコポンだとかは一体何なのだ」

オニヤンコポンを、知らない……?!

そんな、思わせぶりなことを言っておいて、実は同輩などではなかった、だと……。

落ち着け……落ち着け……。

ゆっくり、深呼吸だ。

息ができなかった。

そういえば、体がないのか。

まあ、いい。

オニヤンコポン、とは。

オニヤンコポンとは二次元に御座す御方です。
しかし、四次元なら犯罪じゃありません。

「意味が分からない」

分からずとも問題はありません。

何も分からなくていいのです。

むしろ、分からないでください。

あなた、一般人なんでしょう？

「はあ……」

あの、すつごい今更ではあります。

心、読めるんですか？

「何を今更」

わあお。あかん。死ぬ。

何がとは言わないけどバレたら終わりだ。

しかもこの老爺、心が読めるだけではないだろう。

先の独り言がもし本当ならば？

転生を司る何かなのではないか？

つまり、なんだ、絶体絶命だ。

「……はあ、なるほど。お前、ロリコンか」

「ええ、ロータリーエンジンは実に背德的です」

あのくびれ、惹き込まれるような動き、芸術的発想、洗練された機能美、エクスタシーを感じずにはいられません。

ほんとほんと。

ああん、えくすたしいかんじちゃう。

……胃袋もないのに吐き気がする。

もうだめだ、終わった。

これは完全にバレている。

せめて畜生道に落としてくれ。

そうしたら、チワワに生まれ変わるんだ。

チワワに生まれ変わって楽しいことするんだ！

「幼女と楽しいことするんだ!!」

「わたしのほかに神があつてはならない」

「はい？」

「姦淫してはならない」

「はあ。」

「なんです、突然。」

「聞いたことはある気がしますけど。」

「貴様はこれを破っている」

「そのように仰られましても。」

「……ああ、十戒でしたか。」

「思い出しました。」

「でも私、某一神教教徒ではないのですが。」

「はあ……もう面倒だ。貴様も送るか」

「あ？」

「チワワ刑ですか？」

「魔法の世界で、戦争の真つただ中で、女にして送ってやると言ってるのだ!!!」

「やったぜ。」

「幼女に転生させてくれるらしい。」

「合法幼女（自分）。」

「貴方が神か。」

「そーいや神なんでしたっけね。」

「あ、でも待って。」

「ンガッ、アガッ、ハーツ、ハーツ、ハーツ、アヴッ」

「戦争の真つただ中、だつて？」

「何がと言わないが色々危険なのは？」

「あかん。」

生まれ変わった所は随分と近代的だった。

ガブリエラ・ドールレス・ハイゼ。

今生の名だそうだ。

両親は駆け落ちの末、ろくな稼ぎもなく、父親はどうも運び屋かなんかやって、失敗したらしい。

帰ってこなくなり、日に日に寔れていった母は見ていて辛かった。

そのうち、母乳も出なくなつて、冬が来て。

どうにもならなくなつた母親は子供を、私を修道院に置いていった。

ポロポロと零れ落ちた水滴。

表情の抜け落ちた顔から降つてきたそれは、母に残つた最後の感情のようで。

ふらふらと去つた彼女は、多分、死んだのだろう。

もう、優しく、温かい、私だけの為の子守唄を聞くこともない。

「私の可愛い小さい子」

「ガブリエル様に救われた」

「恩寵あつき私の幸福」

「私の愛しい大事な子」

「私の愛しいガブリエラ」

冷たく雲が棚引く夜。

細い月光に絡まるように、滔々と響いた歌。

私は奇跡によつて生まれ落ちたそうだ。

死産の子に、私を吹き込みでもしたんだろう。

生まれた時から神の玩具なのだ。

それは神ではなく存在 X

祈れ、働け。

Ora et labora.

とは有名な某所のモットーである。

だけど残念ながら、この修道院はとても貧しい。

祈りと労働とを半々で行う余裕なぞない。

まあそれはそうだろう。

育てきれないと置いてかれた子供達を文句も言わずに引き取っているのだから。

無理が出ないはずがない。

というわけで。

祈れ、働け、働け、働け、働け。

うちの実態はこんなところである。

修道院の本分の一つである祈る時間は、朝と食事前と、安息日たる

日曜日くらい。

でも住人の殆どは子供だ。

寝て、働き、遊び、働き、遊ぶ。

正確を期すならばこうなる。

ただ、本来なら遊ぶのも子供の仕事だ。

年長の子は厳しく怒る。

けれど、大人達は困ったように笑うのだ。

そんな大人達に甘えて、私はお友達にじゃれつく。

「ナっ、タっ、リーー！」

「わあっ」

勢いを加減しながら背中に飛び付く。

彼女は驚いて、種を入れた袋を抑えた。

「危ないよガビ」

ナターリヤちゃんは赤みがかった髪をした灰色の瞳の子、見た目の通りスラブ系。

こつちの世界ではスラブ系というのだろうか？

「だいじょーぶ、どうせ畑に撒くんだし」

「駄目だよ？ 何言ってるの？」

あかん。口が滑った。

「まさか、適当に撒いてなんかないよね」

品行方正というより、食い意地張ってる子。

いや、みんな食い意地張ってると言えば張ってるんだけれども。それはそれとして。

「ハイ、ちゃんと撒きマシタ」

「本当に？」

この子、怒らせると大変なのだ。

ずっと口を聞いてくれなくなる。

これは、死活問題である。

「イエス、ママ」

「よし」

「んふ〜」

ああ、幼女のなでなで気持ちいい。

ふふふ、羨ましかろう、羨ましかろう。

あの日以来、彼女からのご褒美はこれだ。

きっかけは硬すぎるバゲットでチャンバラした時だ。

いやあ前世は男なものでね。

心が疼いてしまって仕方なく、そう、仕方なく。

馬鹿共に混ざって遊んでたんですよ。

『何てことしてんの？』

彼女、怒りが一周回って無表情になった。

それからが本当に辛かった。

目を合わせると逸らされる。

前に立つと避けられる。

話しかけても無視される。

パンで買収されてもくれない。

いやあ、胸の奥がキューっとなね。
縮んで痛くなるんですよ。

……ハッ!!

これが……恋……っ!?

恋はさておき。

結局、無理矢理抱きついて泣いてたら許された。

仕方ない子を見る目で撫でてもらいました。

いやあ、チョロい。

女の子の扱いなんてお手の物ですよ。

ああ、そうそう。

これは彼女には言えないことだが。

前世ではすっかり忘れていたが、頭を人に撫でてもらうのはとても心地良いもので。

このご褒美を貰うのは何にも代え難い至福の時となっている。

……待て。待つんだガブリエラ。

人に生まれたのになぜ自ら犬になっているんだ？

「ナタリー、手伝うから種分けて」

私は人間だ、立派な一人のロリコンだ。

「ほんとう？　ありがとね、はいなでなで〜」

「えへへ〜」

ああああオキシトシンに侵されるう〜。

私はナタリーの犬です。

ワオ、背德的イ。

そんなこんなでいろんな幼女に絡みつつ（浮気ではない）毎日グダグダ過ごしているわけだが。

まだ関わっていない幼女がいる。

ターニヤちゃんである。

なかなか近寄り難い雰囲気をしてる子だ。

無口な子は他にもいる。

大人びた子だっている。

それは別に不思議なことでも、珍しいことでもない。

むしろ、明るく振る舞う私が異常ですらある。

事情は色々あるにしても、ここに来るのは親から手放された子達だ。

悲哀なり、怨恨なり、その小さい身には過分なものを背負っている。

血縁というのは、案外軽くはない。

まあ、これについては私も例外ではないが。

近寄り難い、と言ったのは。

彼女が何を考えているのか分からないからだ。

ほんとに分からん。

普段は労働は適度にこなしつつ。

暇なら本を読むか聖堂に行くようなのだが。

それ以外になにかしてる様子は無い。

お分かりいただけただろう。

どうも彼女、まったく遊んでないのだ。

とても困った。

お前ほんとに幼女か？（困惑）

遊んでるならば絡むのは容易い。

遊びに混ぜてもらっただけだ。

でも文学少女に絡むなら最低限の教養は必須。

下手に絡めば邪魔者扱いされて終わり。
初手からハードルが高かった。

しかもだ。

ちよろちよろと回りを嗅ぎ回ってみたのだが。

彼女、帝国語の読みをマスターしてるっぽい。

帝国語と連合王国語の辞書を使って。

そんなの、義務教育受けてる年長の子でも、引っ張り出したりなんかしてないぞ？

お前ほんとに幼女か？ (白目)

前世は大の男であった意地もある。

大学まで卒業してるから相応の語学力もある。

私だってできるだろうと、負けまいと努力した。

彼女の真似をして、同じ帝国語と連合王国語の辞書をふらつきながらも机に乗せたままではいい。

幼女の体のせいなのか。

親しみのない二つもの異なる言語を前に、脳味噌が茹で上がった。

帝国語はもちろん読めなかった。

読めなくて辞書を持ってきたのだから当たり前だ。

もう一方はというと、連合王国語は読めなくはなかった。が、古めかしいし綴りも用法も知ってるものと違っていたりした。

面倒なことこの上ない。

そして幼女は面倒なことができない。

両方の読解を熟す？

出来るはずもないに決まっている。

なんであるの子はできるんだろうね。

きっと天才なんだよあの子は。

私は天才じゃないからしかたないね。

私は転生者なんだけどね。

H A H A H A ☆

せめて、日本語の辞書があればよかったのだが、この修道院には置いてなかった。

まあ、そもそも日本語の書籍がないから仕方がない。

とはいえ、私はロリコンである。

これしきのことと屈しはしない。

普段から私はいろんな幼女と会話してるから、発音は私にも分かっていた。

そして幸いなことに、単語ごとの発音記号が辞書には載っていた。

あとは幼女との素敵な会話の記憶で気力を補充しながらのデスマーチ。

なんとか絵本や聖書を読めるようになった。

ついでに卑猥な言葉を覚えたのは男の性だ。

そんなこんなでやつと簡単な帝国語の読みを習得した私が、せつせと絵本を読んでる合間に。

彼女はもう歴史書を読み解いていた。

信じ難い学習速度である。

手に持っていた絵本を危うく落としかけた。

お前ほんとに幼女か？（呆然）

折角色んな絵本を読んだというのに。

まさか、既に難しい本を読んでいる彼女に、絵本の話をしにいくわけにもいくまい。

目が合ったけれど、つい逃げてしまった。

他の子と遊ぶのも続けながら、歴史書も読む？

読み終えた頃には、彼女は更に難しい本を読んでいるに決まってる。

まだ学習は続けてはいるが、文学少女作戦は無期延期とすることにした。

次なる作戦は聖少女作戦である。

どんな内容かというと。

彼女が聖堂によく行くことはもう話しただろう。

そこで「私もく」と言っただけで一緒に祈りする。

初めての共同作業を終えたらピロートーク。

礼拝堂で破廉恥なことをする背徳的な作戦だ。

つまり、遊びに混ぜてもらおう作戦の亜種である。

この作戦は聖書を学習に使っている時から実行することも視野に入れていた。

なんだかんだで決行を引き伸ばした理由は、主に私情である。

ガブリエラだなんて名前をしているが、あの爺さんやらガブリエルを敬う気にはなれなかったのだ。

母は、たぶん彼らに感謝しているだろう。

何せ私は、駆け落ちまでした二人の愛の結晶だ。

ガブリエルに名前をあやかるほど、彼女は心の奥底深くから救われたのだろう。

死産のままだったなら、母の心はその時点で折れていたかもしれない。

私は彼らをとにかく言う資格を持っていない。

死んでほしくなかったとはいえ、別れたくなかったとはいえ、母の愛に訴えかけ、彼女を生き長らえさせたのだ。

彼女が自殺を試みたり、私を捨てようとする度に、みっともなく泣き散らして。

余計に苦しい思いをさせたのだ。

それでも。

母が彼等に翻弄されたように思えてしまう。

良いように利用されたとは思えない。

いや、違うな。

『恩寵あつき私の幸福』

母からの、私への愛に。

彼等が紛れ込んでいるのが許せなかったのだ。

母を救わなかったくせに、と。

まったく、人の事など言えないな。

本当に、血縁は、重い。

母は、天国に行けたのだろうか。

父は、どうだろう。

後暗い仕事で死んでしまったなら、行けるかは怪しいかもしれない。

死後の世界なんてろくでもないと思っではいるが。

彼女は信じていた。

だから、どうか。

天国で二人が出会えますように。

そんなことを祈ろうと思う。

今日、初めて私は自発的に聖堂へ踏み入る。

うちの修道院は貧しい。

けど、だからといって聖堂までみすぼらしいということはない。

仮にも神の国の領域を粗末なものにはできない。

そんなところだろうか。

当たり前な話、どんなに神聖なものだろうとも建築するには相應の費用がかかる。

むしろ神聖なものほど、豪華につくる為により多くのお金を必要とする。

とある大聖堂は免罪符を売ってまで作られたとか。

帝都ベルン郊外にあるうちの修道院も、それなりのお金を払って建てられたことは間違いない。

その内の少しでも暮らしの為に残しておいてくれたら、もっと楽な生活ができたのではないか、なんて。

働くのが面倒な私は思ってしまう。

我らが修道院の造りは比較的新しい。
新しいとはいっても、数百年前の様式だけど。
窓は広く、天井は高く。

聖堂はとても開放的な空間となっている。

ドームの明り取りは、精巧に彫り込まれた装飾の内の、ヒエラルキア的にちようにど神様がいるはずの位置にある。

なんともあざとい演出である。

でも残念ながら、本物は小細工も無しに、本能で理解させるのだから。
う。

本物とは？

目の前の幼女のことだ。

キラキラと、ステンドグラスを通して色付いた光は小柄な彼女を照らし出していた。

どう見ても天使であった。

煌びやかに陽光に祝福されて、今まさに天から舞い降りたかのよう。
う。

見る者全てを圧倒する姿だった。

あの天才ぶりも、神の御加護なのかもしれない。

しかし、ここで退いてはロリコンの恥。

絨毯に助けられて、足音を殺しながら。

恐る恐る彼女の横へと足を進める。

そう、まだ作戦の序盤。

彼女と一緒に祈ろう、の前である。

緊張しすぎてピロートークを熟せるか心配だ。

だがそれは、無用の心配であった。

正しくいえば、皮算用だった。

ゆっくりと隣に立って、膝を着く前に。

そうだ、ターニヤちゃんの横顔見ちやお。
そう思ったが運の尽き。

「びっ」

私は見てしまった。

悪鬼も逃げる、とんでもない形相の彼女を。

突然過ぎるホラーだった。

いや、ホラーは突然襲ってくるものだが。

彼女は美少女である。

私は一発で顔と名前を覚えれた。

そんな綺麗なお顔が、悪魔憑きとか、そういうのを連想してしまうくらい歪んでいたのだ。

もう恐ろしいこと恐ろしいこと。

だからちよつと漏れた。

男の頃なら驚くくらいで済んだだろうが。

今生は貧弱な少女だったから。

うん、仕方ない。

仕方ないんだよ!!

「タ、ターニヤちゃん、どうかしたの?」

無けなしの勇気で私は聞いた。

「びっ」なんて情けない声で気づかれましたからには、策など無用、
総員着剣、銃剣突撃の思いでアタックである。

まあどうせ、何かあったんだろう。

例えばマセガキにスカートを捲られて天罰を祈っていたとか、そんなところではなからうか。

「……なんでもない」

ンマア、なんてつれない子でしょう!

「なんでもない」ではない。

君は会話スレイヤーなのか。

私のパンツが犠牲になった以上、意地でも会話を続けてやるっ！

「いやいやいやいや、絶対何かあったでしょ。あ、えっと、私ガブリエラって言うんだけど」

「ガブリエラだと？」

「ひあっ」

こあい。

よんぱくがん？

なんでよんぱくがんするの？

何もしてないのにめちやくちや睨まれた。

びつくりして乙女な声出た。

ぱんつがたいへん。

なんにもしてないのに。

いや、本当に、何もしてない。

信じてくれ。

第一印象は大事だからこそ、噂になるような変なことは多分してない。

私はロリコンはロリコンでも、馬鹿なロリコンなんかではないのだ。

ないんだけどもしかしたら何かしちやったかもしれないので聞いてみようと思います、ハイ。

「ガ、ガブリエラ何かししししちやった？」

だめだあ……。

あ、顎が震えて……震えて……。

いやでも本当に怖かったし……。

お前ほんとに幼女か？（号泣）

「い、いや、ガブリエルはそんざ……神様の遣いとして有名だから、ついで……。大丈夫か？」

「だいじょぶよ」

幼女に心配された。

ロリコンなので嬉しいです。

だけど何かの尊厳がいよいよ危ういです。

まあ、でも良かった。

収穫はあった。

「わたしもガブリエル嫌い。神様も嫌い」

「うん？」

ターニヤちゃんは神様を心底嫌ってる。

さすがに驚いたけれど。

「だって、自分勝手だもん」

この感情は、共有できそうだ。

「あれは神などではない」

彼女は言った。

「悪魔ではないと自称していたが」

冷然と。

「神ならば世の不条理を正すものだ」

厳然と。

「私には悪魔としか思えないが」

断然と。

「存在xと、呼んでいる」

敢然と。

ターニヤちゃん。

どんな本に影響されちゃったんだろ。

天才の感性は分からないや。

それは愛情表現ではなく愛情確認

孤児院の一日の終わりはとても早い。

僅かな灯火の油も惜しんで日没には皆が床に就く。

朝には大小高低様々な賛美歌が響き、昼にはきやらきやらと子供特有の甲高い声が空まで届く我らが住処も、夜にはひっそりと、それこそ猫や鴉の声がよく聞こえるくらいに静まり返る。

まるで国中が眠りについた眠り姫の童話のよう。

幼い頃の私は一人だけ起きているのが怖くて怖くて、誰かのベッドによく潜り込んだものだ。

最初の頃は驚かれたが、そのうちに慣れたのか何も言われなくなつた。

それどころかむしろ、引き摺りこまれたり引つ張り蝟になつたりする始末だ。

子供というのは夢中になると加減を忘れたりしてしまうもので。

一回だけだが、余りに遠慮なく両腕を引つ張るものだから痛くて泣いてしまった。

なんとか堪えようとしたのだが、食い縛つた歯の隙間から漏れ出した声に、なんで私が我慢しなきゃいけないんだ、と思つたらもう目の端に溢れてきて。

一度限界を超えると、人間、抑えが効かなくなるもので、どうしようもなかった。

断じて、私が泣き虫だったというわけではない。
その後。

私の涙に皆が怯んだ隙に、手を振り解いてターニヤのベッドに逃げ込んでみたのだが。

いつもは邪険にする彼女もこの時ばかりは黙って受け入れてくれた。

ロリコンは、転んでもタダでは起き上がらないのだ。

ターニヤがデレたつ、と調子に乗って頬とか耳とか髪とかにキスしてたら眠れないと怒られたが。

ちなみに腕枕は一年中ダメだけど、冬ならハグはオツケー。理由は痺れたりしないし温かいからだって。

念の為、筋肉量が多めだから良い発熱量だろうとか言って、男の人と同衾しちゃダメだよと伝えておいた。

酷いことに、そんな非常識なことをするのは君しかいないと返されたので、非常識人として有無も言わず、彼女を引き摺りこんで一緒に寝た。

そんな夜の事情も私が大人になると変わった。

男女七にして同衾せず、というわけではない。

単純に夜が怖くなくなったので、一人で寝られるようになったのだ。

まあ、それとこれとは話が別で、未だに夜這いは続けているのだけれどね。

恐怖の檻から解放された私の最近の趣味は、毎日だと怒られるから時々、こっそり部屋を抜け出して星を眺めることである。

これが綺麗なのだ。

世界が違うからか、知っている星座は一つも見つからないけれど、夜が綻んだようにポロポロと光を零す感動は変わらなかった。

一つ一つの輝きが、透明で、純粹で、単調で。

眺めているとだんだんと落ち着いていく。

永遠にも思えるこの光景が、忙しない日常から私を掬いあげて、一時の安らぎをくれるのだ。

もしかしてと思つて探してみた、紫色だったり、緑色に光る星は今のところない。

青白赤のトリコロールな星ばかりというわけだ。

月も一つしかないし皆既月食で染まる色は赤。

地図を見れば一発で分かることだけだ。

この世界は前世の世界に似過ぎている。

異世界転生の楽しみの半分の半分……よりちよつと多いくらいは無くなつてしまった。

前人未踏の秘境探検とかしてみたかったのだ。でも地球と殆ど一

緒なら、空を浮いてる島とか絶対に無いだろう。悲しい。

私が自分で探検しようとしても、実現できるのは数十年は先のことじゃなからうか。探検の流行りはもう終わっていて、スポンサーを見つけないのも一苦勞しそうだ。

それに、漏れ聞く噂や前世の歴史を踏まえれば、世界大戦は確実に起きる。

その数十年先に、私は生き残っているのだろうか。

遠くを見れば、ガス灯で色付く帝都がある。

綺麗な街だ。

重厚な石造りの街並みは揺るがない確かな空気を持っている。連綿と続く歴史がそうさせるのだろう。

夜闇の中で冷厳と立つ様は月のように神秘的だ。

星空に勝るとも劣らない。けれど。

戦争が始まれば淀んでいくのだろう。

避けようもない敵意と、不満と、狂気とで。

チャプンと水音がした。

「ガブリエラ、こんな所にいたの」

振り返ると、クールビューティーなアニエスちゃんがいきました。パジャマ姿で可愛い。

そして何故かバケツとパンツを持っている。

ほんと何でだ。まさかぬいぐるみ代わりだろうか。

彼女は確か移民の五世だったか、六世だったか、フワフワとした黒髪をしている碧眼の華奢な女の子だ。

どうも重かったらしい。腕が震えていたから、バケツは代わりに持ってあげた。

雑巾が熱帯魚よろしくバケツの中を泳いでいる。これが可愛かったりするのだろうか。私には分からない。

両手で持っても重すぎたのですぐに床に下ろした。

パンツは、何だか見覚えがあるというか、どう見ても私のものなんだけれど、何で持っているか怖くて聞けないのでスルーする。

「アニー？ どうしたの？」

「どうしたの？　じやないわ。ベッドがもぬけの殻なんだもの。いつまで待っても潜ってこないし、戻ってこないし」

「そういえば今日はアニエスちゃんの日だった。」

「ここまで追ってくるなんて凄い執念だ。」

「たぶん、というか疑いようもなく、怒っている。眉間が寄っているのも見間違えじゃなくて本当のことなんだろう。」

「やってしまった。」

「怖くてお手洗いから帰れなくなったのかなと思って、迎えに行けばいないし」

「それ、一昨年の話だよ」

「とつても心外である。」

「あと恥ずかしいのでその話は蒸し返さないで。」

「探検の真似事でもして、粗相しちゃったから帰れなくて泣いてるんだろうなって探し回っても、中々見つからないんだもの」

「そんなに子供じゃないよ私」

「一体私はアニーにどう思われているんだ。」

「何となく、想像はつくけど。」

「遺憾の意を表明したい。」

「人を心配させるうちは子供なのよって、シユヴェスターが言っていたわ」

「むむ。」

「ぐうの音も出ません、はい。」

「でもどうしてだか素直に謝れない。」

「心配してくれたの？　嬉しいー！」

「だから、こんな風におどけてしまう。」

「誤魔化さないで。ごめんなさいは？」

「ごめんなさい」

「はい、良い子良い子」

「良い子なのはアニーの方だ。」

「仮にも元大人が嘆かわしい、本当に。」

「それと、お話は署で聞きます」

「ええ!? そんなあ、私謝ったよ。アニー」

「ごめん、済むなら警察はいりません」

ベッドの中で滅茶苦茶怒られた。

それと、彼女が持ってたパンツが何処かに消えた。

心当たりはないと供述しているアニス被疑者と一緒に探したけど見つからなかった。怪しい。

まったく、パンツに罪はないというのに。

おお、可哀想な私のパンツ。

神よ、どうか私をパンツの元へお導き下さい。

後日、被告人ナターリヤの不法所持が判明。

神の恩寵だろうか。しよぼいが。

あと疑っちゃってごめんねアニー。

ペラリと頁を捲る。

読み書きの自習計画は未だに続行中で、やっと歴史書の中の文が所々読めるようになった。

帝国語は名詞の頭文字が必ず大文字になるから、多少の文法知識が身につけば少しは文意が辿れるのだ。

それに、分からない所は彼女に聞けば教えてくれる。お陰様で、今まで何とか間違えた解釈をせずに済んでいる。

とはいえ、それも数年もすれば古い知識になってしまおうのだろうか。

「……何か付いてるか?」

「んくん、なーんにも」

むふ、気づいてないみたい。

首筋の、私が付けたキスマーク。

それ以外は、なーんにも付いてませんよ?

集中が切れる度に、目が合うまでターニヤを眺めては、また本に向かう。

インクと紙の匂いに包まれながら文字を追うのは、何だか不思議な気分になる。

森にいるかのように、余計な思考が全て抜け落ちて、情報だけで満たされていく。

詰め込みすぎると、頭が痛くなるけれど、その痛みがちよつと気持ち良かったりする、時もある。

頬杖についてボーッと眺める。

前世ではまるで読めもしなかった刺々しい文字。

実用性を疑っていたけれど、慣れるとどれが何の文字なのか、案外認識できる。

でも、読めるのと読み易いのは別なんだよね。

ゴシック体なんてものはまだないみたい。

特許申請でもしてみようかしらん。

デザイン案なら著作権なのかな？

まあ、孤児の女の子の発明なんて、絶対誰かに成果を横取りされたり、台無しにされたりするよね。

こつちの世界でも、ラダイト運動にあたるものは起きているんだし。

ほんと、将来、どうしようかな。

「……むん」

「…………」

あれ、どこまで読んだっけ。ページ戻ろ。

ここ……は読んだ。次のページからだ。

「……むむーん」

「…………」

どうも、本の内容とは別のことを考えてしまう。

今日はもう、疲れちゃったみたいだ。
文字が目滑って、内容を何も掴めない。
うん、勉強の時間は終わり！
パターンと閉じて、書架へ返しに行く。

「……諦めたのか」

ターニャちゃんはまだ読書を続けそうだし。
遊びに行くほどの体力も残ってないし。
うーん、絵本でも眺めてようかな。
推しの絵師の絵本はいつ見ても飽きないのだ。
一冊選んで、紙を広げてペンを手に、いざ。
ベッドには持ち込めないから、苦肉の策として、いつも模写を試み
ている。

見様見真似で描いてみても、子供だからか思うような線が書けない
のだけだ。

段々と上手くなっている気がする。

今日のお題は、三日月に腰掛けた魔女。

下界を見下ろして、流れ星を降らせている。
薄らと浮かんだ微笑みは気まぐれな猫の様。

「ねえねえターニャターニャ」

「どうした」

絵本を見ていると、思うことがある。

「魔法って本当にあるのかな」

歴史書にはその影響が所々現れている。

でも、生まれてこの方、それらしい現象にも人にも物にも、まるで
出会ったことがない。

この世界ではあるとは聞いていても、実物も見ずに信じられはしな
かった。

「忌々しいことにある」

「忌々しいんだ……」

嫌いなのは存在xだけじゃなかったらしい。

魔法も彼女に何かしたのだろうか。

「恐らく、私は魔導適性があるのだろうか」

「え、なんで分かるの？」

自信があるというより、確信しているようだったから、つい聞いてしまった。

だけど、珍しくすぐに答えが返ってこない。

見やると、口に手を当てていた。

表情の動きは少しだけに抑えちやつたようだけど、少なくとも何かを恐れていたりする様子はないね。

地雷を踏み抜いたわけではなさそうでホツとした。

全く、脊髄反射で反応しちゃダメなのに。

最近では本能で行動し過ぎたな。

「……あー、秘密だ」

「……ふーん？」

何だか知らないけど弱みを握ってしまった気がする。

うーん、隠し事はなんだろう。

もしかして、存在xと契約したとか？

僕と契約して魔法少女になってよって。

「じゃあ、ターニャは魔女っ子なんだね。いいなく、可愛いなく」

「……は？ え、可愛い？」

ちなみに、もう一つだけ。

彼女の弱みを握ってたりする。

まあ、予想はついてるだろうけれど。

「知らないの？ ほら、見てこの絵」

「う、ん？」

魔法の絵を見せる。

会心の出来だ。これはよく描けてる。

「魔女っ子は可愛いのが最先端なんだよ？」

「……………おによれ」

「……………」

「存在xに、災いあれ!!」

どうしてそこで存在xへの呪詛が出る。

おうまいがーのターニャ版なのかな？

「……ターニャどこ行っちゃうのー」

プルプル震えて一喝したと思ったら。

ピューって、逃げられてしまった。

とっても分かりやすい。

彼女、自分が可愛い存在だということを断固として認めないのである。

恥ずかしがってるのも可愛いよって伝えたら、羞恥心の永久機関になりそうだ。

余談だけど、可愛いのが先端は嘘である。

そもそも、魔女っ子なんて概念、まだこの世界にはない。あつたら驚きだ。

でも、彼女。

可愛いものの関係の知識にはとても疎い。

誰かが無粋なことでもない限り、ずっと勘違いしたまま恥ずかしがってるんじゃないだろうか。

世の中の為になることをするのは、存外、清々しい気分になるものだな。

あれ、あれれ、ターニャ？

本をしまい忘れてるのは別に良いけど。

これ、どこから持ってきた本なの。

日が暮れ、暗くなった中ではろくに記号も読み取れず、しかも馴染みの無い本だ。

たった一冊しきうだけで30分もかかった。

お夕飯はナタリー達が守ってくれてたけど。

ただでさえ薄いスープが冷めて泣けた。

ぐすん。

義務教育が始まった。

といつても朝起きる時間は変わらない。

朝ご飯は皆で、がうちの方針だからだ。

ナタリーが正面、ターニヤが対角、アニーが横の席に座る。

泥棒事件以来、被告人ナタリーは私の隣じゃなくて正面へと連行されている。

対角じゃないのはターニヤの温情だ。

もしかしたらパンツ質をとられてるのかもしれないけど、執行猶予中に再犯を犯すなんてことは、たぶん、恐らく、ないんじゃないかなって私は思うよ、うん。

「父よ、あなたの慈しみに感謝して、この食事をいただきます。ここに用意されたものを祝福し、私達の心と體を支える糧とします」してください。私達の主によって。アーメン」

一同揃つての食事は温かい志、というよりは。

祈りは皆ですするという宗教的指針と、バラバラに食事の準備なんて贅沢はできないという経済的問題が理由だったりする。

「ターニヤ、また誤魔化したでしょ」

ビシツとナタリーが弾劾した。

「私も聞いていたわ」

「これは、個人の信条に絡む繊細な問題だ」

いつもの事ではあるけれど。

ターニヤは存在xについてだけは頑なだ。

このやりとりも最早一種の儀式になっている。

「別に、口先だけで言えばいいんじゃない?」

「発する言葉が人を形作るんだ」

「むーん」

まあ、言ってることは最もである。

でも、この時代だとまだそれは生き辛いと思うんだけどなあ。

「口先だけって、何てこと言うの、ガビ？」

「ひんつ。ナタリーその言い方私のトラウマなんだからやめてよ」

びっくりして顔色を窺ったらちよつとムスツツとした。

そう、当たり前のように日常に、人々に、宗教は浸透しているのだ。宗教と関わらないのは難しい。

例えば学校は、うちの宗派の運営する所だ。

政治にもしつかりと食い込んでいる。

共産主義のルーシー連邦とかにでも行かないと、これから逃れるのは難しい。

今の発言は、日本人的には、手は適当に洗って参拝しようぜとか、そんなところだろうか。

注意するほどではないけれど、面と向かって言われるとムツとなることを言ってしまったようだ。

少し自分に失望してしまう。

「ふーん、なでなで要る？」

「欲しい」

欲しい。

「とんだマッチポンプだな」

「ダメよガビ、盗人の思うつぽよ」

ハッ。危ない危ない。

「そうだね。アニーがなでなでして」

ちよつと気を許すとこれだから、もう。

このパンツ泥棒め。

「だあーっそれはもう謝ったでしょー！」

パンが八つ裂きにされる。

ああ、可哀想な黒パン。

この世に生まれたばかりに。

こんな目に遭うだなんて、そんな非道な。

「あれのお陰で、ガビにもターニヤにも警戒されたのよ。悲しかった

わあ。ごめんで済むなら警察はいりません」

「そう、警察はいりません。にしても意外だねターニヤ」

「ちよつとガビ、変な所だけ切り取らないの」

彼女が放った言葉、存在xめと呪詛を吐いているのに、中々似つかわしくないものだったのだ。

「何がだ？」

「私の特権がアニーに盗られたあ……」

「取ったとは心外な。この子は皆のものよ」

「だってターニヤ、神様嫌いなのに、『はじめに言葉ありき』云々みたいなこと言うんだもの。アニー、私は私のものです」

全く、しれつと共有されては困る。

私のプライベートがなくなってしまう。

「む、これは人間の理性による成果たる知見であって、そんなものを援用したわけではない」

それは分かっていますとも。

やっぱりターニヤは存在xを嫌ってはいるけれど、避けるほどに頓着はしてないみたいだ。

「気を付けてガビ、こうやってアニーは外堀を埋めてくよ。恐ろしいったらないわ」

「ナタリーのは自分で埋めたんでしよう」

……今の発言は、私のはアニーが埋めてるってことだよ。間違いない。

むん、と唸りながら目を合わせる。

首を傾げて惚けるんじやありません！

「やっぱりターニヤが一番安心できるなあ」

「むう、ターニヤはずるい」わ」

はあ、とため息が聞こえた。

振り向くと、彼女が胡乱な目で二人を見ていた。

「二人共、猫は追えば逃げるものだぞ」

「にゃんにゃん?」

「にゃんにゃんにゃん?」

え、あざと可愛い。最高。

ターニヤグツジョブ。

「にゃーん」

とりあえずそれっぽく返事をしてみる。

「あら、了承が得られたわ」

「奇遇ね、私もなのよ」

「何を!? してないよ!?!」

なに言質取ったことにしようとしてるの!?

そんなのはなしです空約束です!!

「三人とも、学校に遅れるぞ」

む、まずい。ターニヤが食べ終わりかけだ。

足を引つ張らなくては。

「ターニヤ、早食いさんなんだ、可愛い」

「可愛いわね」

「ターニヤ可愛いよー」

いや、私もかなり適当なこと言ったけど、二人とも援護射撃が雑過ぎるよう……。

「お前達が喋り過ぎなんだ。それと、べつに早食いは可愛くなんてないだろう。もう騙されないぞガブリエラ」

「ギャップ萌えする、ほんとほんと」

クツ、援軍には期待できずとも私は諦めない!

ターニヤ! 可愛い! ギャップ萌え!

ターニヤ! 可愛い! ギャップ萌え!

……早食いはターニヤ的には可愛くない。

心にメモメモっと。

「はあ、もう私に行く」

「ターニヤ、終わりの祈りは?」

忘れていた、とボヤいてターニヤが席に着いた。

なんだかんだで、可愛いと言われるのは未だに慣れないみたいだ。

三人が食器を置いて手を組む。

え、三人?

「……感謝のうちにこの食事を終わります。慈しみを忘れず、全ての人の幸せを祈りながら」

「父よ、感謝のうちにこの食事を終わります。あなたの慈しみを忘れず、全ての人の幸せを祈りながら。私達の主によって。アーメン」

「もう、またちやんと言わないで」

「アーメンは言ってもいいんじゃない？」

「待って、皆もう食べ終わっちゃったの」

私だけまだパンが残っている。

スープをうっかり飲みきってしまったので、間違いなく時間がかかる。

「可愛い早食いさんなので」

「可愛い早食いさんだからね」

二人で笑いあつて楽しそうである。

こういう時に限って仲がいいんだから、もう。

「先に失礼するぞ」

酷い。ご丁寧にハモリまでして。

「……真似をするな」

「減るものでもないじゃない、別に」

「一度言ってみたかったのよねー、これ」

「待って、待ってよう、待ってつてばー！」

置いてけぼりにされた。

走って追いかけたら吐きそうになった。

泣くぞ。泣いちやうぞ。

ぐすん。

それは別頸之交ではなく管鮑之交

「では、ガブリエラさん」

「はいはい！」

教育というのは国にとって大きな意味がある。

共通の言語、標準的な話し方、共通の歴史観、教育レベルの底上げ。要するに国民意識の養成だ。

エリユーザス・ロートリンゴンのような係争地区では地元住民に阿った対応もとられるが、統一という過程を必要とした我が国ではこれは重要な儀式だった。

「返事は二回しないこと」

「はい」

とはいえ、生粋のベルンっ子である私にとっては大したことではないのだけれど。

路地裏とかで聞くような下品な言葉や訛りを口にしなければ、気を付ける訛りや方言なんて何にもない。

「聖書はありますか？ エズキエル書第拾捌章を開いて、最初のところから読んで下さい」

「はい、主の言葉が私に臨んだ」

むしろ、困っていたナタリーに教えてあげるくらいだ。巻き舌は彼女の方が上手なだけけどね。

ルーシー風の発音だなどフェツセル先生に言われたことで、気にも止めていなかった発音の微妙な違いが恥ずかしくなったらしい。

可愛いから直さなくていいのにと愚痴ったら、ベルンっ子だからそーゆーこと言えるのよって頬っぺたを揉みしだかれたっけ。

ま、確かにフランソワ訛りならお洒落だっけなるけど、ルーシーではそうはならないもんね。

「お前達がイエスラオルの地で、この諺を繰り返し口にはしているのはどういうことか。『先祖が酸い葡萄を食べれば、子孫の歯が浮く』と」

「はい、ありがとうございます。上手に読めましたね。今日はこの節を授業で扱います」

因みにだけど、道徳については宗派別に学校ごと分かれている。国民意識だの何だの言っていたのに、と意外に思うかもしれないけれど、お隣の共和国ですら政教分離は今世紀に入ってから。

まして、かつては諸邦に分かれていたというのではその手の配慮もなしに政治なぞを行えもしない。

お貴族様に言わせればほんの少し前のことだけれど、無理強いをしたが為に帝国を割ったの戦争になった経験もあるのだしね。

『先祖が酸い葡萄を食べれば、子孫の歯が浮く』、というのは御先祖様が悪いことをしていたら、その子供達まで罪を背負う……ピンと来ていないわね、少し難しかったかな……同じように悪いことをした人として見られる、というような意味です」

うちの孤児院と同じ派のこの学校はいわゆる普遍派というやつで、抵抗派の学校ほど頻繁に礼拝があるわけではない。

本人は遺憾の意を表明するだろうけど、もし仮にターニヤと一緒に向こうの学校に通っていたとしたら。

胃がキリキリ痛むくらいならマシで、ひよつとしたら虐められていたかも。

「我らが主はこれを人々に尋ねました。そうしてお話しになることは、主は常に私たちの傍にいらっしやって良いことをしたことも、悪いことをしたことも、全部分かっているとのことです」

どうにも彼女、勉学はきっちりやっても宗教沙汰に関してはちっとも靡かないのだ。

愛国教育だって甘んじて受け入れているのに、妙なところに拘りおる。

今だってギリギリと歯軋りが隣の席の私まで聞こえてきて、ああ、もう。

「人の心は弱いものです。否応なく外に、内に、惑わされて道を踏み外してしまいます。偉大なる最初の教皇聖ペトロ猊下であっても、三度主のことを知らないと言っていました。もしあなたが自信を持って何も悪いことはしていないと言えるのであれば、それは正しく主のお陰でしょう」

「へーい」

「アンゼルス君、あなたは昨日17回目の忘れ物をしたわよね。失敗してしまうことは必ずしも悪いことではないですが、反省も後悔もないのであれば話は別です。聖書はどうしました？」

学校に行ったら身内ばかりでなくなるから、猫を被るくらいはするかなと思っただのに。

全く、手のかかる危なっかしい子だ。

「悪魔祓いに使って燃えてなくなりました」

「それは良いことをしましたね。後で保護者の方にお話を伺わないといけないかしら」

「ごめんなさいバケツ持って廊下に立つのでそれだけは許してください」

「余計なことはしなくていいです。今回は先生の聖書を貸すので、二度とこんなことがないようにしてください」

「へーい」

「返事は」

「はい！」

「よろしい」

アンゼルスが馬鹿なこととしてたから皆の耳には届かなかったようだけど、次やったらこちよこちよの刑だ。

私は優しいから事前通達はしてあげよう。

「ターニャ、これ」

「うん？」

というわけで、ノートをチヨキチヨキしてお手紙を作りました。

「読んで、今」

「……ああ、手紙か。次は誰に回せばいいんだ」

「回さなくていい。ターニャへのだから」

「私に？ ……分かった、後で読もう」

だめです。筆箱にしまわないで。

「今読んで、今」

「はあ……なにに、次歯軋りしたら擦りの刑？」

ヒクリと彼女の頬が歪む。

瞳孔もかつ開いてる。

「や、やめてと言ってもやめないからね」

どうしてそう反応がホラーチックなんだ。

損害賠償を要求するぞ。

何のとは言わないけど。

「いや、そもそも私は歯軋りしていたか？」

「してなかったら手紙を書いたりしないですー」

「……信じ難いが、もしまたやっていたら擦る前に教えてくれ。自分で気づけるようになったら改善もしやすいだろう？」

本気で気付いてないみたい。

……重症だなあ。

「……教えるけど、擦りの刑はするからね」

「……ガブリエラが擦りたいだけではないか」

それはその通りである。

「ターニヤが擦りから逃げたいんですよ」

「罰であれば別に擦りである必要はないだろう？」

「そこまで嫌がるってことは罰は擦りで良さそうだね」

ふふん、相手が悪かったね、ターニヤ。

腐つても転生者なのでこの程度の押し切りは余裕である。

「くっ……女子に会話では勝てないか」

「何か言った？」

「前を向け。先生が見ているぞ」

「むむっ」

振り向くと目が合ってしまった。

まずいぞこれは。

ニツコリ微笑まれたので慌てて聖書を読む。

確か、例の第拾捌章は、「ワシがお主らの悪行を逐一確認しとるっちゆうになーにが『子孫の齒が浮く』じゃボケエ勝手に悪人決めるんじゃないわレエ」みたいな感じだったと思うのだけど。

「人の罪はその人自身にあります。親の罪、子の罪は分け隔てられる

ものなのです。であればこそ、貴方がたは友達といるとき、友達自身を見てあげなさい。それは友達を救うだけでなく、貴方もきつと救うでしょう」

……ああ、なるほど？

有り触れた道徳の授業かもしれないけど、何となく先生の言いたいことが分かった。

この学校には孤児がいる。

孤児になった理由は様々だ。ただでさえ孤児というのは生き辛い上に、中には犯罪者の子だっているだろう。

子供というのは良くも悪くも正直で、それを気にしない子は単に遊ぼうとするだろうし、気にする子は遊ばないどころかイジメさえやるかもしれない。

そんなことに囚われないで欲しいと伝えたかったのだろう。聖書はおまけみたいなものだ。先生にとっては本命だろうけど。

当たり前のことと言えるかもしれないけど、難しいことだ。成長して大人になれば尚更に。

金持ちが財布を忘れても無賃乗車を許される一方で、貧乏人は許されないなんて傾向があることは実験結果で出ている。

人は人を判断するのだ。ごく自然に。

「これで倫理の授業を終わります。ガブリエラさん、ちよつと来てくれる？」

「はい……」

歌うような声で呼ばれてしまった。

てくてくと十三階段を昇る気持ちで進む。

グレッツシエル先生は倫理を担当していることもあつてか優しい人だけど、言うべきことはきっちり言う。だからこそその倫理担当なのだろう。

間違いなくターニヤに話しかけてたことで怒られる。

言うこと言うことが大概正論なので黙ってお叱りを受ける他にない。

バツが悪いというか、居心地が悪いというか。

元大人の擦れていた筈の心は、どうにも子供の頃に返っていたように。

怜悯な視線に本能が慄いてるのか身が竦んだ。
とん、と。

柔らかい指の腹が額を突いた。

「……反省してるようならいいわ。でもターニヤさんの迷惑にもなってますし、授業中にあまり話し込んで駄目よ」

「はいっー」

「全く……現金なものね。それではご機嫌よう」

「ご機嫌よう」

なぜだかあつさり許された。

ラッキーである。

とりあえず目の端を拭った。

日頃の行いだらうか。

滑るように後ろ姿が遠ざかる。

ついでだから言うところグレッツシエル先生は間違いなく私立出身である。

つまりは良いところのお嬢さんだ。その清楚な佇まいはクラスの女子の憧れだったりする。アニーとか、マリーとか、サラとか。

やっぱり、お金持ちはお得である。

「怒られなくて良かった」

お得って思考がもうお金持ちの思考じゃないなあと思いつつ、

ほっと一息。

「ねえガビ、先生から何話されたの？」

「授業中の私語は慎みましょうって」

「えっ、よりにもよって倫理の授業で？」

「ガビ……グレッツシエル先生の授業中に何をやっているの」

「だ、だってターニヤが齒軋りしてね」

キョトンとするナタリーとアニー。

何とか怒られずに済みそう。

件の彼女の方を見れば、一瞬、目が合った。

徐ろに本を置いてこつちに歩きだした。全く、面倒そうにしているけれども。お前さんのせいで私が怒られたんだぞつ。ちよつとは悪びれるとかして欲しい。まあ、切り抜けられたからいいけども。ターニヤに首を振って合図するとしつしつて手を振られた。大人しく二人の方に視線を戻しておく。はあ、と溜め息が三人分聞こえた。

「……ありそう。そつかあ、歯軋りしてたんだあ」
「あの子、まだあの癖が直っていないのね」

「……三人分？」
もしかしてターニヤ合図が分かってないの？
「ちよつとまつ——」

「二人とも、あんまりガビを苛めてやるな」
助けに来てくれたのは嬉しいのだけど。
会話のボールが明後日にストライクである。

「「……」」
「先生に叱られたのだから充分だろう」
「「……」」

ダメ押しまで完璧で、もうどうしようもない。
何か違和感を覚えた顔をしているけど、鈍感過ぎるぞ女の子なのに。女の勘のおの字も無さそうだ。

「……三人ともどうした？」
「三分擲りの刑を求刑します」
「どういう事だナタリー」
「請求を受理します」

「何の話だアニー」
鳩が豆鉄砲食らった顔をしている。
でも、これどちらかと言うと七面鳥撃ちだね。

「私としましてはターニヤの義に免じて二分刑への減刑を申請します」

流石に不憫だから助け舟は出すけれど。

二人相手にどこまで話をずらせるものか。

「待って待って待ってどういうことだ。ガビじやなくて私なのか？ だったら弁護士はいないのか、私は無罪を主張する」

あれ？

「弁護士は私ガブリエラが務めま」

「チェンジだ」

なるほど。

「弁護団も四分刑が妥当と判断し受け入れます」

「告訴人に異議はありません」

「ではそのように審議を進めます」

つまらない冗談は高くつくのだターニヤ。

「数字が増えていて自称弁護士！」

「泥舟を御所望されましたので」

「随分と楽しそうなことをしてるわね」

タンツと磨き抜かれたメリージェーンが床を叩いた。

サラちゃんである。

「サラ、私の弁護をしてくれないか？」

「いいわよ、何をすればいいかしら？」

「私の擽りの刑を何とか撤回してくれ」

「つまらないから嫌よ」

栗色の髪を靡かせて何故だか得意げな笑みで断った。

端的に言うとなみたいな女の子だ。

ターニヤはというと、予想通りだけど憤懣やる方ないとばかりにフンスと鼻息荒くしている。

私だって、サラの方を頼ったことに一言申したいのだけど。

「やっぱり、三回回ってワンと言うなら考えなくもないわね」

「巫山戯たことを言う」

犬なら従順な筈ではって？

彼女はマウントを取りたがる子犬なのだ。

取り入ると分かり易いくらい懐柔されるのもワンワンポイントが

高い。

「そんなこと言える立場かしら？」

「チツ、仕方ない。ガビ、回れ」

「私!? ターニャじやなきや意味ないよ」

「二人とも回りなさい」

なんてこつたい。

私まで巻き込まれたじやないか。

「契約に無いオーダーだ。違約金は？」

ターニャはターニャで別の裁判でも起こす気なのか。君達は理不尽というかマイペース過ぎる。

タシーンツと音がした。

見やるとナタリーが腕を組んで仁王立ちしていた。

「裁判長、これ以上の議論は無用よ」

「時間が押しているので判決を下します」

「待て、裁判所なら和解案を探るべきだ」

誠に遺憾ながら時間切れらしい。とても、そう、とても残念なことだけれど、しかたがない。

「主文、被告人を懲り刑五分に処す」

「求刑は四分だった筈だ。再審請求する！」

「弁護団は裁判所の寛大な措置を歓迎します」

「告訴人は望外の結果を得られたので異議なし」

縋るような目で見られても……いやこれ瞳の奥でメラメラ燃えているね間違いない。

「おい弁護士、職務を果たせ、弁護をしろ！」

「私ガブリエラは和解と減刑を試みましたが残念ながら被告人に伸ばした手をはたかれたのです」

「わたくしサラは非金銭的な形の賠償による和解を試みましたが残念ながら提案を聞き入れて貰えませんでしたわ」

「くつ、三十六計逃げるに如かずか！」

ターニャがドアに駆け出すけど何故だか無意味な気がした。何でだろう。

「そういえば時間は？」

「授業を始めるよ、ターニヤ君」

「はい……先生……」

「ああ、うん、やっぱり。」

「チャイムが無情に鳴り響く。」

「しかし……廊下まで聞こえてきたが、面白い遊びをしていたね。法廷ごっこという違うルールの遊びがあるんだけど今度やってみるかいい？」

「はい、いいえ先生。お気持ちだけで結構です」

「そうかい？ うーん、残念だなあ」

「トボトボとターニヤが席に戻ってきた。」

「ターニヤ、助けに来てくれてありがとうだね」

「肩代わりしてくれてもいいんだぞ」

「半分こね。2分半だけだよ」

「……半分だけか？」

「ありがたいは無いのー？」

「助かるよ、ガビ」

「随分と呆れた目をしてらっしやる。」

「マツチポンプじゃないです。」

「ちゃんと助け舟も出そうとしたよ？」

「首振ってもう大丈夫って合図したのになー」

「あれはもう駄目ですの合図じゃなかったのか？ それならそうと
言ってくれ」

「止めようとしてターニヤに無視されたんですー」

「一体いつの話だ」

「ガブリエラ君、ターニヤ君」

「あ、やば。」

「「……はい」」

「授業を始めるよ」

「「ごめんなさい」」

主文、ターニヤ・デグレチャフ、ガブリエラ・ドーレス・ハイゼ両名を擲り刑七分に処す。

前の時間にお花摘みに行けなかったからと泣き落として二人で逃げ出したらなんと出待ちされまして。

ターニヤが酷いんだよね。

下から抱きついて腋を守ってあげてたのに、放せつて言うからその通りにしたら私を置いて逃げ出してね。

「裏切り者ー!」

「ガビ、私が囮になる!」

「私が囮になつてるでしょーが馬鹿!!」

まあ別にいいんだけどね。

「アニー」

「ええ」

「追いかけるわ」よ」

本当に囮になつたから。

いやあどつてもラッキーである。

しかし、分かつてないのだろうか。

彼女、図書館に籠もりがちで運動不足なのだ。

逃げ切れる筈があらうものか。

何の勝算があつて逃走したのか謎である。

「ガビ」

「あ、サラは追いかけないの?」

しまった。

「私の仕事ではないわ」

「そっかあ、それじゃあまたね」

「待ちなさい」

「ひゃい」

厄介所がまだ残っていた。

「おーよしよしよし」

「えへへ」

「こやつ、私の弱点を知っているのだ。」

「でもダメね」

「へっ?」

「何か言うことがあるんじゃない?」

「……」

「……」

「サラ様、撫でてください」

「おーよしよしよし」

「んふ〜」

ねえ、神様。

神様は私をチワワにしたかったのですか?